

氏名: 森 栄梨子

実施国: 国内(群馬県)

協力活動

活動名称 嬢キャベ海外協力隊プロジェクト

実施期間 2020年3月19日 ~ 2020年12月15日

## (1)申請した動機

申請者が所属する「自然塾寺子屋」は、JICA 海外協力隊の経験を生かして、世界の農村と日本の農村をダイレクトにつなぎ、故郷の群馬を活性化しようと2001年に設立された。以来約20年間、「農村から世界の未来を育てる」をモットーに、開発途上国の農村と群馬の農村両地域の人たちが「農業」や「地域振興」などのテーマを共に学び合う人材育成活動を展開しており、海外研修員の受け入れや、JICA 海外協力隊の派遣前技術補完研修、都市農村交流、世代間交流など、群馬県と世界、農村と都市、子どもたちとシニア世代を結ぶ活動を、地域住民と一体となって展開してきた。

申請者は、海外協力隊帰国後に同団体に入職し、協力隊員の派遣前技術補完研修(コミュニティ開発、野菜栽培、水の防衛隊)や中南米、アフリカ、アジア諸国の行政官やNGO職員、農業従事者等への研修指導、地元群馬県の地域活性化事業および多文化共生事業に携わってきた経験を有する。

JICA 海外協力隊プログラムと連携した青年の人材育成と協力隊活動の社会還元、農村地域における協力隊経験者の活躍の場の創造は、自然塾寺子屋のアイデンティティ的活動であり、申請者にとってもライフワークの一部として取り組んでいる。

昨年3月下旬、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、海外協力隊として開発途上国で活動していた隊員約1,800名が世界中から緊急帰国した。一方、地元群馬県内では、技能実習生の来日がストップし、農業生産に深刻な状況が生じていた。こうした状況を踏まえ、海外協力隊員の適切なフォローアップによる活躍の場づくりと産地(嬢恋村)の双方の課題解決を図ることを目的とした「嬢キャベ海外協力隊プロジェクト」の実施に向けて企画調整に動き出した。

協力隊活動は、日本では経験できない体験の連続である。言葉や文化習慣、価値観が大きく異なるコミュニティに飛び込み、何もできない自分と向き合う。何度もぶつかり挫折しながら、少しずつ信頼関係を築いていく。試行錯誤しながら、やがて芽生える地域発展に直接的に貢献できているのではないかという期待と責任感。言葉や国境を越えて一つのものをつくりあげていく面白さ。ともに目標を追っていくなかで生まれる連帯感。「豊かさ」、「便利さ」、「幸せ」に対するものさしの変化。現地の仲間や家族、第二のふるさとなど、かけがえのないものを参加者に与えてくれる。

経験の浅い日本の若者が、生きる力みなぎる任地でできることは限られているが、2年間の任地での奮闘の中で、現地の方々に教えてもらったことが、多くの隊員のその後の人生の大きな礎、原動力となっている。協力隊経験が人生に与えるインパクトの大きさや、その経験を通して世界の未来を支える頼もしい人材となって次の舞台で活躍している数えきれない卒業生の顔を知っているがゆえに、社会貢献を志した若者たちに、この成長の機会を無駄にして欲しくない。活動の達成感や使命感、

今後社会で活躍していくために、本当に大切にしなければならないことは何かを感じて欲しい。そのような想いでこのプロジェクトを立ちあげるに至った。

このプログラムでは、次項のとおり、国内待機中または次のステップへすすむ前の隊員に、もう一度一つのコミュニティに飛び込み、地域の方々から多くを学び、ともに汗を流し援農活動を行いながら、「第二の任地」のために何ができるのか、日本の現場で「協力隊活動」を実施する彼らをサポートすると同時に、納税者である日本国民に海外協力隊事業の意義の理解の促進をしながら、今回の協力隊員の地域への関わりによって見えてくるさまざまな事柄を、今後の日本の地域振興や隊員の社会還元活動の活性化にむけてフィードバックを行った。

## (2) 活動内容概要

### 1. 目的

- ① 帰国を余儀なくされた協力隊員が、再び一つのコミュニティに飛び込み、「第二の任地」で地域の発展のために汗を流す機会をつくる
- ② 協力隊活動の振り返りと整理を行い、社会還元の方策を検討し実践する
- ③ 孺恋村と絆を育み関係人口を拡大しながら、群馬の農村の資源や価値を感じるきっかけとする
- ④ 国内の現場から地域づくりについて学び、国内外の現場を体験したたくましい人材を未来へ輩出する
- ⑤ 本プログラムを通じて得られる地域と隊員双方の教訓や知見の向上を、今後の地域振興や隊員の帰国後の社会還元活動の活性化につなげる
- ⑥ 青年海外協力隊事業の理解や支援を促進する

### 2. 活動内容概要

- ① 隊員が新型コロナウイルス感染拡大の影響で人出不足になった農家にて援農活動に従事する
- ② 隊員が受入農家で農作業や地域活動への参加、全体研修等を通じ、国内の現場から地域づくりについて学び、再赴任や任期満了後の進路に向けてモチベーションを維持する
- ③ 隊員が全体研修会等を通じ、協力隊活動の振り返りと整理を行い、社会還元の方策を検討し実践する
- ④ 隊員が全体研修会等を通じ、任期終了後のキャリアパスについて考え、自身の目指す将来像の検討や、それに向かってそれぞれステージにおいて必要なスキルを習得する手段を考える
- ⑤ 本プログラムを通じて得られる地域と隊員双方の教訓や知見の向上を、今後の地域振興や隊員の帰国後の社会還元活動の活性化につなげるため取りまとめを行う。

### 3. 隊員の活動状況

#### ① キャベツ生産援農活動(別紙: 隊員名簿)

5月～11月(受入農家12軒)

1次隊 群馬県出身 5名(5月21日～11月9日)

2次隊 全国出身 5名(6月20日～11月9日)

短期隊員 1名(7月)

3次隊 全国出身 1名(7月31日～11月9日)

②全体研修(毎週金曜日)

- ・海外活動で得た経験の振り返りと整理
- ・国内の現場から地域づくりについて学ぶ
- ・進路ガイダンス

③Team Based 地域実践活動(別紙:報告会発表資料)

<武田・信岡・宮田チーム>

キャベツ生産地としての孺恋村の今後～技能実習生との共生～

<大木・神澤・福島チーム>

技能実習生母国の味 x 孺恋の味(キャベツ)

<大河原・岩井・餅原チーム>

孺恋村におけるジェンダー

<相澤・中里チーム>

技能実習生の余暇活動の充実～ スポーツを通じた地域交流～

④地域おこし活動への参画

- ・SNSにて孺恋村や農業の魅力を発信 <https://www.facebook.com/jocv.tsumagoi.cabbage>
- ・鹿澤館解体作業のお手伝い
- ・「ハレルヤプロジェクト」ダンスの振り付け  
<https://www.youtube.com/watch?v=Uj3AKzfThKQ&feature=youtu.be>

4. プロジェクトコーディネーター(2名)の業務(自然塾寺子屋 矢島理事長及び申請者)

【事前業務】

- ①ニーズ調査、プロジェクト企画立案、関係機関との調整
- ②案件化調査(群馬県隊員7名の援農体験及び現地関係者との意見交換)の実施
- ③宿泊・移動等受入ロジの調整
- ④参加隊員・受入農家の募集、面接選考(隊員)、受入農家とのマッチング

【プログラム実施中の業務】

- ①隊員への入村時のオリエンテーション、各所表敬訪問、導入プログラムの実施
- ②援農開始後、隊員へのフォローアップ、巡回指導、個別面談
- ③隊員やJA・受入農家、宿舎等関係者との連絡調整
- ④送迎または送迎コーディネート
- ⑤地域実践活動の指導
- ⑥毎週金曜日の「全体研修会」実施(協力隊活動の取りまとめ、地域活動関連講座、進路ガイダンス他)
- ⑦広報、取材対応
- ⑧傷病時・緊急時のサポート
- ⑨結団式(団員の紹介、活動の目的や使命の再確認)の開催
- ⑩オンライン報告会、解団式の開催

## 【事後業務】

- ①関係機関との連絡調整
- ②報告書の作成、プロジェクト実施成果の評価・分析と方策検討

### (3)活動の成果・苦労した点・反省点等

#### 1. 隊員へのガイダンスやフォローアップ等

- ・プロジェクト開始当初は過酷な農作業に対してモチベーションを維持できるよう、同じ立場の仲間から学ぶピア・ラーニングやチームの相互支援力を高められるようチームビルディングを中心に行った。また、自分が従事している単純な農作業が生産活動のどの部分にあたるのか、作業の解説や、農家目線だけでなく、市場流通や消費者の目線、農業技術の開発や各機関の連携など、群馬の農業、日本の農業等大きな視点で日々の活動をとらえられるようなインプットをした。
- ・プレゼンテーションや討議を通じて、自身の海外協力隊活動の整理や課題分析、必要なスキルを再確認や、海外活動で得た経験を孺恋村での活動のどのような場面で活かせるか(活かしているか)経験を可視化、言語化し、海外と日本の農村の共通性や親和性を確認。週単位での学びの目標設定を通じてモチベーション維持を促した。
- ・海外の現場で初めて農村社会に出会った隊員たちだったが、「外国人ボランティア」の立場では、地域内の様々な人間関係が関わる出来事に対応することをそこまで期待されなかったり、本当の意味での状況把握まで及ばなかった、或いは、任期途中だったのでそれを体験できなかった人が大半だったと想像する。その中で、今回言葉も十分に分かる日本の農村社会での活動や生活において、諸々の出来事に対して十分な対応ができず、短絡的な言動も目立った。そのような場面では、様々な村民同士や部落間、関係機関間の関係性や立場を説明し理解を促すように対話したり、今後も村民はずっとその村で生活していくということに想像や配慮を持てるようガイダンスした。実際の事例と一緒に対応しながら、ミクロ・マクロのアンクルで物事を俯瞰し持続可能な視点を養えるよう支援した。
- ・全体研修会や外部講師によるセミナーを通じて、地域活動の手法や国内外の事例から学び、孺恋村での地域実践活動を行った。地域が抱える課題解決に資する活動を関係者と調整しながら実践し、国内の現場から地域づくりについて学んだ。地方 x グローバルの可能性について体感できたという隊員側のフィードバックもあった。特に地域の内なる国際化、多様な人材の活躍の場の創出、多文化共生等についての課題についても現場で体感し協力隊の経験を活かす舞台としての「地方」や使命感を感じた隊員も多かった。
- ・全体研修会や外部講師によるセミナーを通じて、任期終了後のキャリアパスについて考え、自身の目指す将来像の検討や、それに向かってそれぞれステージにおいて必要なスキルを習得する手段を考えたり、関係者との人脈を形成する機会を提供した。海外活動が急きょ中断となり、進路について検討する機会がなかった彼らにとって、自身の希望する分野の先輩方やその他多様な方々との意見交流を通じて、検討を深めるバッファ期間になったとの隊員側のフィードバックもあった。
- ・受入農家を中心とした孺恋村との絆が育まれ、群馬の農村の資源や価値を感じるきっかけとなった。県内出身の隊員からも「まだまだ群馬について、農業について、親戚が農家であるのにもかかわらず知らないことがたくさんあり、もっと地元目線を向けることが大切だと感じた。群馬を誇りに感じた」とのコメントもあった。また、プロジェクトとして村に入り活動した経験を通じて、以前より「海外協力隊」としての公人意識や帰属意識が高まったとの感想もあった。孺恋村関係者にも彼らを通して、JICA や海外協力隊、国際協力への親しみと理解が生まれた。

#### 2. 協力隊の経験が日本で就労する際にどのような面でプラスになるのか、受入地域の反応等

今回の地域貢献活動は、隊員側には社会人経験や農業労働の経験がほとんどなく、農家側には協力隊員の受け入れの経験がほとんどない環境においてプログラムを実施した。プログラムの中心となった援農活動は、労働条件が非常に厳しく、また、家族経営の農家における労働人員の構成は、家族構成員と外国人技能実習生や住み込みのアルバイト数名で、家族以外のメンバーについては、毎年総入れ替えになるため、半年のシーズンのみの関係性となる。そのため「言われた作業を過不足なくやる」ことのみが求められ、それ以外の資質については当初関心を持たれなかった。

その中で、5カ月間の援農活動を経て、受入農家や地域から隊員の下記の資質について評価の声が聞かれた。

- ・様々な困難な状況に耐え、現地の現実の中でも高い使命感を持ち、モチベーション高く前向きに活動に取り組む姿勢
- ・モチベーション高く爽やかに活動し、相手への想像力や思いやり等、職場を明るく思いやりがある雰囲気に変えてくれた。
- ・初めての土地で人々と交流しネットワーキングしていく力
- ・異なる文化や考え方を受容しながら、実態や課題、可能性を把握していく力
- ・現場で把握した実態をもとに、既存の枠組みに捉われない新たな視点でアイデアを生み出し、相手の立場にたった提案や実施方法がとれる力

総じて、「異なる社会・文化の中で、周囲の人々と一緒になって課題の解決・改善に取り組んだ経験」が今回のプロジェクト活動においても活かされたようである。

#### (4)今後のプラン

本プログラムを通じて得られる地域と隊員双方の教訓や知見の向上を、今後の地域振興や隊員の帰国後の社会還元活動の活性化につなげる

- 1)地方における国際協力人材の育成や帰国隊員の更なる活躍の場の創造
- 2)地域の担い手不足を改善するため、多様な人材の受け入れ方策や活躍の場の創造による地域活性化についての議論の深化、取り組みの推進
- 3)地域の担い手不足を改善するため外国人材との更なる連携が必要になってくる状況下、双方にとって有益な人の交流が行われ、両地域間の人々に絆を生み、ともに育つことのできる取り組みの推進